令和６年度第２回大阪府市文化振興会議　議事概要

◆日　時：令和7年3月24日（月）14時から16時まで

◆場　所：エル・おおさか（大阪府立労働センター）南館10階　南1023会議室

◆出席委員：橋爪会長、片山副会長、有栖川委員、志村委員、内藤委員、沼田委員（オンライン出席）、

原委員、宮崎委員

**【概　要】**

**１　会議の成立について**

（事務局）

・委員10名中8名の委員の出席により、会議が有効に成立していることを報告

**２　次期文化振興計画の検討について**

(橋爪会長)

・令和6年度第１回大阪府市文化振興会議において、府市それぞれの次期文化振興計画の策定について、知事、市長から諮問を受けた。その際に、策定にあたっては、スケジュールがタイトであることから、効率的に議論を進めるため、文化振興計画検討ワーキング部会を設けて集中的に検討することとし、令和6年11月29日と令和7年2月18日に会議を開催して、そこでの検討内容を事務局で取りまとめて頂いたものが資料３から資料５になる。本日は、これらの資料をもとに、次期計画の「目指す将来像」「理念」「施策の方向性」などについて、審議を行いたい。事務局から、各資料について説明願う。

(事務局)

（大阪府…「資料３」「資料４」に基づき説明

大阪市…「資料３」「資料５」に基づき説明）

(橋爪会長)

・事務局からの説明について、各委員からご意見、ご質問はないか。

（内藤委員）

・「基本理念」の「文化芸術活動の場として選ばれる都市」に関して。私は、「芸術ホールをつくってくれ」とは言わないが、大阪府と大阪市が公立の芸術ホールを持たないということをどういうふうに考えるのか。また、劇場やホールを持っていないという状況の上で、現状、民間の演劇に公園や遊休施設、地域における施設等を開放するというようなこともあまり行われていないが、その辺りが、今回の計画の基本理念や施策の方向性に引っ掛かってくるのではないか。そのあたりの具体化が、今後の計画策定で必要になってくるのではないか。

・「策定のポイント」の「⑤新しい文化の創造」について、文化芸術がある種の商業性を持って実施されるというようなイメージで捉えられやすいことを懸念している。人気を博しているものを応用した出し物や、わかりやすい出し物にはお客さんは来る。しかし、少し踏み込んで考えないと面白さがわからない作品や、難解さを楽しめないと良さがわからない作品が商業として成立するか否かは、その受け手たる観客・読者によるところが多い。そうすると、いわゆる芸術作品を享受する人々の態度、芸術と向き合うための観客・読者の水準が向上しなければ、わかりやすい商業的なものにしか人が集まらないという傾向が継続してしまう。「芸術は観客に対する答えのない問いである」と言った人もいるが、答えのない問いをどう受けとめるかを楽しめるという環境というか、受け手の感受性を育まないと、芸術は伸びないと考えている。その辺りのことを明記することができればよいのではないか。

(橋爪会長)

・具体的な施策の展開については、今後、継続して意見交換をしていければと思う。

・内藤委員からのご意見に対し、事務局からの意見等はないか。

(事務局)

　　　・「論点整理」については、まず「どういう理念をもとに施策の方向性を考えていくべきか」という方向性を整理しているものであり、具体的な施策展開については、今後のご議論などを踏まえて検討していくものだと考えている。

・「文化・芸術が商業的なものとして捉えられているのではないか」とのご意見については、11月・2月に開催された文化振興計画検討ワーキング部会では、「営利・非営利に関わらず文化芸術活動が持続可能な成長・発展を遂げなければいけない」「そのためには多様な分野での連携が必要である」というご議論をいただいており、事務局としては今回の案はそのような考え方を踏まえたものになっていると受け止めている。

(片山副会長)

・文化振興計画検討ワーキング部会の一員として一言補足したい。内藤委員は、「新しい文化の創造」という観点について「非常にマーケット思考のものをイメージする」とのことだが、これは、むしろ逆で、「新しい文化の創造」というのは、「市場性がなくても、実験的につくっていくことに意義があるので、そういったことをやっていこう」ということである。例えば、ＶＲを使った表現ということでいくと、小泉明郎氏の「プロメテウス三部作」など、非常にクリエイティブで、新しい取組みを実験的にやっていたりする。必ずしも商業性はないかもしれないが、それこそ、世の中にいろいろなものを問い掛けるというような実験をしていく、そういう創造活動が大阪で活発に行われていくことが重要で、むしろ市場性があるものというのは、「新しい文化の創造」ではないほうの、マーケット・オリエンテッドなものだという整理になっているので、その点を補足させていただく。

(橋爪会長)

・ほか、ご意見ないか。

(志村委員)

・「施策の方向性」の「Ｂ」の「④あらゆる文化芸術活動の持続可能な成長・発展に向けた連携」というところで、事務局の説明では、この「あらゆる」の部分について、「営利か非営利の別に関わらず」と解説されていた。私の個人的な感想になってしまうかもしれないが、文化芸術を享受する側や文化芸術活動に参加する人々について「あらゆる」と表現されるのは全く違和感がないが、文化施策の中で、文化芸術活動について「あらゆる」と書かれてしまうと、商業として成り立つものまで含めて対象範囲があまりに広がりすぎてしまい、本来、本当に守られるべきものまでも、相対的に存在感が少し薄まってしまうのではないかというような懸念を感じる。「あらゆる」という言葉を使う必要があるかどうかということを意見させていただきたい。

(橋爪会長)

・ありがとうございます。ほか、ご意見ないか。「目指す将来像」、「基本理念」、「施策の方向性」は、具体的な施策の前の枠組みなので、ここに関して、一定程度、こういった内容で良いのかというところなどについて、ご意見をいただければと思う。

（有栖川委員）

・頑張ってまとめられたな、いろいろ目配りはなされているな、とは思う。ただ全体として、これは、感想、印象に過ぎないが、「大阪はこうしたい」「大阪だからこういう方向があるんじゃないか」とか、「今の大阪はこういう問題が生じかけているので、それも踏まえてこういうふうに舵を切りたい」「どちらに向かっていいかはこれから考えるけれども、とにかくこんなふうな大阪になりたいんだ」とか、「こういう都市を目指したいんだ」という熱のようなものは感じない。とはいえ、「いや、その熱のようなものがないと駄目じゃないですか」とまでは言わないし、思わないのだが。あればベストだが、やはり問題を整理して理念として掲げるとなると、こういう文章になるかと思う。大阪と規模の近いどの都市でも、この資料に書かれているようなことが言えるかと。

・唯一違うのは、「①2025日本国際博覧会（大阪・関西万博のレガシー）」に関してかと思うが。万博については、およそレガシーなんて残りそうではない気配が濃厚だと思っている。1970年の大阪万博のときには国立民族学博物館が残ったりした。当時の万博のレガシーとしては、当初に計画されていたものもあれば、開期後に「残しましょう」ということで残されたものもあるが、今年の大阪・関西万博でそういう何らかのレガシーが残るという想像はつかない。

(橋爪会長)

　　　・有栖川委員が指摘された、そういった「大阪だから、こういう方向があるんじゃないか」という要素を入れるとしたら、具体的にどこか。

(片山副会長)

　　　・一言よろしいか。私は大阪の人間ではないので、その辺りの感覚はちょっとずれているのかもしれないが。世界を見渡すと、やはり差別と分断がまん延し、紛争があり、自然災害でも多くの人が亡くなり、というときに、テーマに「いのち」を掲げた万博をした大阪としては、そういう問題を世界に問い掛けるという発信にこだわりたくないのかな、というところは、外から見ていると大いに感じるところである。特にトランプ政権が発足してから、あのような状況が動いているなかで、文化的権利を含む一人一人の人権をきちんと尊重していくということを大阪はやるんだ、ぐらいの意思表示があるということが重要で、そこを重視していく計画にしていくべきであるかと。今はこの点が、アメリカ等では軽視されている。ウェル・ビーイングの問題にしても文化の社会性・公益性についても、アメリカでは今、大変軽視されていて、トランプ大統領がジョンF.ケネディ舞台芸術センターの会長になって事業の内容を検閲するようなことまで起こっている。学術にも介入してきて偏向的なことが行われていくようなことが起こっている中で、大阪にはそれを跳ね返すぐらいのエネルギーがあってよいことだと思っている。基本的に本日お示しされている案ではそうした内容を目指した書きぶりをしているのではないかと思うが、その辺りは、大阪の人々としてはどうか。

(橋爪会長)

　　 ・万博の理念の継承の仕方というところについて、事務局から意見はないか。

(事務局)

・答申の作成にあたっては、事務局としては、役割上、委員の皆様のご意見をまとめることに徹している。万博の理念の継承という点については、文化振興計画検討ワーキング部会において、「『いのち』の問題を文化芸術に係る計画の中でも考えていく必要がある」との議論になり、その点を踏まえて本日の資料にまとめさせていただいているところ。

　（宮崎委員）

・私からも一つ申し上げたい。私もワーキング部会に入らせていただいているメンバーの一人であるが、有栖川委員のご意見を踏まえて、改めて、大阪独自の、大阪というものの視点というか、そういうものが今回の計画にもう少し入っていてもいいのかなと感じた。大阪は、本当に古くから、東アジアとの交流などから、色々な文化への影響もあり、多様に発達してきているし、江戸時代以来に関して言えば、船場の旦那衆など商人や民間の支援によって大きく文化が発展してきたところである。以降、バブル崩壊後の財政難や、新自由主義的な潮流もあったが、それぞれの時代のなかで、それぞれに濃い大阪独自の文化や表現が生まれていて、今も日々新しい文化がたくさん生まれているところだと考えている。東京、関東方面では、どうしてもマーケットを意識した部分が大きくなってしまうので、どうしても自分独自の表現というより、どちらかというと、「ウケる」ような表現を狙いにいく部分が多くなるのかなと思っているが、一方、関西圏、特に大阪においては、もちろんそういう方向に行くときもあるが、やはりアーティストたちは自分たち独自の表現というものを求めている。小さくても、「やっぱりこれって大阪しかできないよね」というものがたくさん生まれている。その辺りの経緯についての捉え方は各分野や世代間によって全然違うので、明確に今回の計画のなかに入れることは、もしかしたら、難しいのかもしれないが、そういう気概が感じられるような要素がどこかしらに入ると、有栖川委員や、私のような文化芸術を担っている側、活動を行っている側にとっても、「大阪府や大阪市が、自分たちのことを見ていて、どうにかしようと歩み寄ってくれているんだ」みたいな感覚が少しでも持てるようになるのではないかと思ったので、今後の議論の中で、考えていかないといけないのではないかと考えたところである。

(橋爪会長)

　　 ・今回の大阪・関西万博の最初の構想は、私が中心でまとめたもの。基本、健康長寿が前提で、これから日本で少子高齢化が進んでいく中で、「誰もが幸せな社会とは何ぞや」ということを考えるというのが、最初の大阪側の案だった。　その議論の中で、「いのち」というキーワードが出てきて、「誰ひとり取り残されず」という形になったところ。

・今回の万博のコンセプトには、国連が掲げた持続可能な社会、SDGsに貢献するという考え方がある。誘致の段階でも「三方良し」、つまり「売り手良し、買い手良し、世間良し」が大阪独自・関西独自の価値観であることを世界にアピールした。英語で“win win win philosophy”と翻訳して「皆にとっての、もっと良い社会を作りましょう」と呼びかけた。万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」だが、その展開のなかに、やはり文化振興に資するところがある。大阪らしい、誰もが元気で、いきいきと暮らせるようなまちを目指すのだ、という考え方があり、そこに文化の重要性も含まれている。特に、世界に貢献するという視点、世界の人々と一緒に何かを創りだすという視点は、ポスト万博における展開として重要ではないかと考えている。熱量が感じられないというご指摘を踏まえて、文言でそういったところを表現できないか、書きぶりなどの工夫は文化振興計画検討ワーキング部会で検討できればと思う。

(有栖川委員)

　　　・一言よろしいか。大阪らしさという点については、「大阪にはこんな歴史、伝統、文化があって」ということを押し出すよりも、私としては、「大阪にはこれがない、あれがない、欠落している、どこかに追いつかなくてはいけない」、「他の街にはあるのに、大阪にはないのでキャッチアップしなくてはいけない」「『そりゃ、東京に行ってしまうよな』という点を補わなければならない」と書いてあったら、自分は感動したと思う。「足りないものが自覚できている」「危機感があったのか」「そこに気がついているなら大阪は変わるのかもしれない」「熱量がある」と。

(橋爪会長)

・そのあたりについては、文化振興計画検討ワーキング部会のほうで検討していきたい。

・計画の案としては、書きぶりについては引き続き文化振興計画検討ワーキング部会で検討するということで、大まかな方向性については今回の案の通りでよろしいか。

(片山副会長)

・一点だけ。今日委員からご指摘を受けたところで「施策の方向性」の「Ｂ」の「④あらゆる文化芸術活動…」について、確かに「あらゆる」がイメージするものというのが広すぎるのではないかというのは、確かに納得するところがあるので、表現は再検討したほうがよいのではないかと考えている。

（志村委員）

・「多様な」、で、いかがか。

(片山副会長)

・ご提案の通り、「多様な」のほうがよいかもしれない。そのあたりの書きぶりは変えたほうがよいように思っている。

（橋爪会長）

・ひとまず座長の判断としまして、「目指すべき将来像」「基本理念」「施策の方向性」の方向性まではお示ししている案でご了承いただき、その先についてはまた次回以降ご意見をいただくということでよろしいか。

（異議なし）

（橋爪会長）

・ありがとうございます。では、次の議題に移ります。

**３　大阪府市の文化事業の進捗について**

(橋爪会長)

・本審議会として、府市の文化事業に対して進捗状況を把握し、チェックしていきたい。

・府市それぞれより、今年度の事業実績及び来年度の事業予定について説明願う。

(事務局)

（大阪府…「資料6-1」「資料6-2」「参考1」に基づき説明

大阪市…「資料7-1」「資料7-2」「参考3」に基づき説明）

(橋爪会長)

・事務局の説明について、各委員からご意見、ご質問はないか。

(原委員)

・少し気になったところとして、先程の文化振興計画に関する議題で、「あらゆる人の」という文言が出てきたが、そういう意味では、多様性、あるいは包括性といったところに触れるような事業が、もしかしたら、少なかったのではないかなと。大阪府からの説明では、江之子島文化芸術創造センターのところで、大阪府内で活動する障がいのある方を現代作家として迎えて作品を展示する企画展のことに触れた箇所があり、大阪市からの説明では、地域文化事業のところで「共生」という言葉が出てきたぐらいかと思う。今後、事業を進めていかれる上で、多様性や包括性というところに、もう少し意識的に触れていかれるというようなことを期待したい。

(橋爪会長)

・ありがとうございます。ほか、ご意見等はないか。

(志村委員)

・「史跡難波宮跡維持管理」のところで、「ホームレステントの撤去を行ってホームレスの数をゼロにした」ということが書かれているが、文化財の維持管理というところと、こういったここでしか住処のない方々の住処を撤去せざるを得ないというジェントリフィケーションの問題などもある。非常にこのあたりは難しい問題だとは思うが、もしその際の状況がわかるようならば、ホームレスの方が何人いらっしゃったとか、この方々がどこに行かれたかということをご教示いただきたい。

(有栖川委員)

・当地は我が家の近所であり、たぶんお２人ほどであったかと記憶しているのだが。

(事務局)

・大型のテントをしっかり設置されていらっしゃった方については、そのテントをここ毎年度、１件ずつ３年にわたって撤去させていただいた。

・そのほか、テントを設置せずに時々いらっしゃる方というのは、今でもふらっと当地にいらっしゃるところである。５年ぐらい前だと、もう少し、７～８人ぐらいはいらっしゃったかと思われる。そして、そういった方については、福祉的なところにつないだ方もいらっしゃるし、最後に撤去した大型テントについては、法的にきちんと手続きを確認しながら、結果的には持ち主のいらっしゃらない間にすべて撤去したという状況である。

(橋爪会長)

・30年前、私が調査に関わったときは、天王寺公園や大阪城に１万人ほどのホームレスの方がいて、その後、自立支援とか、いろいろな施策を打ち、今は限定的にまだ何人かおられるという状況かと感じている。難波宮跡にはこれから整備が入るので、大阪市としては、ほかのところに行っていただくか、自立支援させていただくような、そんな施策を打っているという理解でよろしいか。

・ほか、ご意見はないか。

(有栖川委員)

・私としては大阪市の「文学碑記念の集い　文学碑維持管理」という事業が気になる。アーツカウンシル部会からのコメントで「本事業は『大阪は文学の街』というイメージを維持し、発展させるための重要な機会となっており」と書かれており、「やっぱりこんな感じで表現されるな」と思うところである。文学のイメージを維持するということは、確立しているということになるので、「確立させるべく」とか、「浸透させるため」という段階にあると思うが。「大阪は文学のまち」という見方は、私もそうだとは思うのだが。西鶴、近松から辿れば、立派な小説や偉大な書き手が連綿と続くまちなので、「文学のまち」だと思うのだが、文学への扱いは冷淡だと思う。その上、直木三十五と織田作之助の文学碑の計２基について、「現状確認を行った」とだけ書かれているが、それは要するに「ちょっと見てきた」だけということではないか。それは事業だと言えるのか。

・まず「文学のまち」だというイメージがないといけないのに、全然そういうイメージが広まっていない。そこが問題だから手立てを講じるとか、そういうところから始めるべきなのではないかなと。とある先輩の作家が「大阪は痛快なまでに小説家に対して敬意がない」などと言っていたことがあった。その方はそれを面白がってそう言っていたり、「そこがいい」と言ったりしていたのだが。敬意は払われなくてもいいのだが、もうちょっといろいろ、文学に親しみたいだとか、楽しみたいだとかという、小説好きというか、読書好きの人たちの気持ちを癒やすようなことをやってほしいなと思うし、そのためには「文学のまちというイメージを維持し」と言っていたら駄目だなというようにも思った。

(橋爪会長)

・大阪市としては、今のご意見への受け止めはいかがか。

(事務局)

・大阪市の担当課としても、委員のおっしゃるとおりだと感じている。過去、文学に関する取組みをいくつかやっていた時期もあったが、財政状況の悪化等により、少しずつ削減され、今となっては、文学碑関係の事業と、織田作之助賞といった事業になっている。大阪は「文学のまち」というイメージが、現状、無いというご指摘だが、そういったイメージを持っていただけるような取組みを我々としても考えていかなければいけないということで、ご指摘を受けとめたいと思う。

(橋爪会長)

・文学館という箱物の構想は流れたが、文学館という名称でソフト面での活動はあった。今ではその種の事業もなく、文学碑だけになったという理解でよいだろうか。

(事務局)

・その通りである。

(橋爪会長)

・そういったことを踏まえて、今の「文学のまち」への取組みのようなものを、もう一度きちんとやっていかなければならないと。先ほどの演劇へのご指摘も同様かと思う。以前、難波宮の演劇祭などがあったが、今はない。

・ほか、ご意見はないか。

(内藤委員)

・大阪市立芸術創造館の自主事業というのは、だいたい具体的にはどういうことをやっているのか。数少ない市の公共ホールだと思うが。

(事務局)

・いま、手元に今年度の具体的な事業を説明できる資料が無いので、後日、委員の皆さまに資料を提供することでご質問に替えさせていただきたいと存じる。

(内藤委員)

　 ・一応、行政が資金を出せば、ある程度はすべて自主事業になるわけだが、自主事業の幅が全体的に狭いと思う。つまり、何かに助成をするとか、鑑賞機会にお金を出すとか、またはその団体にお金を出すとかということで、それ以外には、そうしたホールや施設に資金を出すという形態もあるが。自主事業というのは、お金を出して新しい公演をつくらせるとか、つまりはアーティストに出資して、アーティストが集めたメンバー、スタッフで、何か今の大阪の才能を発揮できるような作品創作、それを支援するための作品創作という形式の自主事業もあるし、育成ということで、一般的なワークショップではない、もっと踏み込んだワークショップというのも一応自主事業に入ってくるかとは思うのだが。そういう意味では、ある一つのカテゴリーにぐっと凝縮された自主事業で、もう少し幅広い柔軟な自主事業のあり方みたいなものが発想されればなという印象を受ける。　そうして、芸術創造館という数少ない公共ホールを利用したり、作品発表をしたりする若者たちをどんどん増やしていくと、　それが指導者を育成するということにもなるし、その人たちが面白い作品をやってくれればお客さんも集まり、観客の育成にもつながる。その人たちに何らかの助成をして、合同公演をやってもらうだとか、様々な機会を劇場が提供できれば、またさらに新しい作品が誕生して、観客の育成とアーティストの育成が同時に実現していくかと思う。芸術創造館は旭区にあり、それほど一等地にあるというわけではないので、そこに若者が集まり、活況を呈せば、施設の利用頻度も高まり、新しい若者の感性もそこで生まれていくということになるのでは。芸術創造館には、音楽スタジオも入っているかと思うが。公共ホールでの自主事業のあり方というのは、多岐にわたっていいと思うので、様々な助成も含めて、もっと手を広げて幅広く発想されたらありがたいなと考えている。

(橋爪会長)

　 ・ご意見ありがとうございます。事務局としては、いま、データのようなものは手元に無いということでよいか。

(事務局)

　 ・その通りであり、後日、ご覧いただきやすい形でまとめた資料を委員あて提供させていただきたい。

(橋爪会長)

　・その方向で進めてもらいたい。ほか、ご意見ないか。

(沼田委員)

　 ・私からも意見を述べたい。今年度の事業報告において感じたのは、やはりネットワークの形成のための機会が少ないということ。文化振興計画に関する議題でも大阪らしさに関する議論があったかと思うが、大阪の人々の強みはぶっちゃけた本音で話せる対話力で、ネットワーク形成も得意な文化だと思っている。事業を実施する上で、こうした「ネットワーク」という観点をもう少し入れるとよいかと感じた。すでに、アーツカウンシルでも少しずつ個々の人々との対話や、若手のネットワーク形成など宮崎部会長とともに色々と試みているが、もっと誰もが自発的に対話できるような環境があるとよいと思う。

・多様性というキーワードも先ほど出てきたが、例えば、いわゆるハイ・アートと言われるアートをやっている方が、福祉とのつながりが薄いために、期待されるものから少し外れたイベントを行ってしまっているというケースも見受けられたりする。それはつまり、そういうところのネットワークが弱いことが原因になっているのではないかと。ぶっちゃけた本音で話せるという大阪という地域の強みも含めて、そうしたネットワークという観点についてもっと考えてもいいのではないかと感じている。

(橋爪会長)

　・ご意見ありがとうございます。ほか、ご意見なければ、時間も押しているので、次の議題に進ませていただきたい。

**４　大阪アーツカウンシルの取組みについて**

（橋爪会長）

・大阪アーツカウンシルの今年度の活動実績と来年度の活動方針について部会長である宮崎委員からご説明いただきたい。

（宮崎委員、「資料8-1」「資料8-2」に基づき説明）

（宮崎委員）

・最後に、資料8-2の最後に、「大阪の文化芸術を未来へつなぐ－『つくる』視点を軸とした創造環境整備の提案」というアーツカウンシル部会からの「提案」を掲載している。今年度の活動を通じて「大阪の文化政策はこうあるべきではないか？」という内容をまとめたものであるので、お読みいただければ幸いである。

（橋爪会長）

・ありがとうございます。ただ今の報告に関しまして、委員の皆様からご意見やご質問はないか。特に次年度の活動方針については、この本会議で承認することとしていきたいと思うが、いかがか。

（宮崎委員）

・一つ補足させていただきたい。一応大阪アーツカウンシルのほうでは、これまでも「提案」を出しており、それをもとに大阪府・大阪市の各事業の担当者とと、「こういう提案を出しているけれど、どう思いますか？」という意見交換はしており、例えばそうした意見交換の結果を踏まえて、大阪市の助成金の制度を今年度から大きく変えていただいていたり、いろいろ改善をされているなという思いはある。　ただ、より大きく取り扱っていただけるとよりよい方向に進んでいくのではないかと、個人的には思っている。

（橋爪会長）

・大阪府・大阪市のほうでも、どのように「提案」を踏まえていけるかについてご検討いただければと思う。委員の皆様からはほかにご意見はないか。

（内藤委員）

・私からの意見を申し上げたい。本日の様々な会議資料やそれにかかるご説明を拝聴して、全体的に万博とインバウンドというのが、ある程度、事業の大きな軸の一つになっているという印象を受ける。万博がどうこうとは言わないが、公共が大枚をはたいて行うのだから、万博のテーマを引き継ぎながら、色々なものをうまく引っ張れるのであれば、引っ張ったほうがいいと思うが、そのために色々なもののテーマが啓蒙的になりすぎるというのは危ないし、その辺りは、アーツカウンシルのほうで、しっかりと見定めてほしいと思っている。例えば、公共は世の中がよくなるために貢献する、それは当たり前だと思うが、私は演劇を、世の中をよくするためにやっているわけではない。例えば、仮に私が世の中をよくしようと思って演劇をやることで、逆に世の中が悪くなったりする、というようなこともある。それは、戦争中の事例を考えればわかると思うが。そうしたことを踏まえて、例えば一つの戯曲とかお芝居のあり方で、「いのち輝く未来社会」というものが入ったような作品に対して異様に肩入れしたり、そういう作品を奨励したりということになると、それは「演劇で啓蒙してくれ」という話になり、危険ではないか。つまり、万博、万博で物事を進めすぎることに対する危うさを感じるので、その線引きについても考えなければいけないのではないかなということを、今日は強く思った次第であり、大阪アーツカウンシルにも考えてもらいたい。

（橋爪会長）

・ご意見ありがとうございます。時間に限りもあるので、ほかにご意見が特になければ、アーツカウンシルの次年度の活動は承認いただくということでよろしいか。

（異議なし）

（橋爪会長）

・それでは、アーツカウンシル部会におかれては、ご提案いただいた活動方針の案に従い、事業を進めていただければと思う。

・特段のことがないようでしたら、本日の議事はこれで終了したい。ありがとうございました。

―　以上　―